「石巻専修大学　研究紀要」第35号　99－107　2024年３月

子育て支援における絵本活用に関する分析と考察

高橋　有香里*

A Study on Utilization of Picture books in Childcare support

Yukari TAKAHASHI*

Department of Human Education,Faculty of Human Studies,
Ishinomaki Senshu University,Ishinomaki 986-8580,Japan

1. はじめに

厚労省は、子ども・子育てへの支援について、「子どもを産み育てることに喜びを感じられる社会」を目指し、子育てにかかる経済的負担の軽減や安心して子育てが出来る環境整備のための施策など、総合的な子ども・子育て支援を推進している。[1)]その内容は、子育ての孤立化や、保護者が地域や必要な支援とつながらないこと等を課題として上げ、課題解決のために地域子育て支援拠点の設置を進め、親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安・悩みを相談できる場の提供を目指している。[2)]

この子育て支援の場では、各子育て支援拠点や、自治体の広報誌掲載等の内容から親子への絵本の読み聞かせの取り組みが盛んに実施されている事が窺える。このように子育て支援のツールとして用いられることの多い絵本だが、その利用方法の問題点が明らかにされたり、読み聞かせ場面に関わる保護者の心情を理解してプログラムが構成されたりすることは多くない。本研究では、望ましい子育て支援の在り方を追求するために、絵本の読み聞かせが子どもに与える影響や絵本をツールとした子育て支援についての先行研究を整理すると共に、現状の問題点を明らかにした上で、筆者が行った子育て支援の活動実践を検討し、考察を行うものである。

2. 先行研究の整理と読み聞かせの効果

近年、文部科学省でも「絵本で子育てを楽しく」と呼びかけ、大々的に「読み聞かせ」が子どもに良い事を謳い、「子育てに絵本を取り入れるべき」風潮が世間に蔓延しているように感じられる。では、データとしてその効能はどのように実証されているのか。以下、先行研究を検証する。

2.1　子どもの読書活動の効果

国立青少年教育振興機構は「子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究」についての報告[3)]をまとめた。

それによれば、子ども（小学校高学年、中学校、高校）の時期に読書量が多いと、意識、非認知能力、認知機能が高い傾向がある。ここで示されている意識・非認知能力とは、自己理解力（自己肯定感を包含）、批判的思考力、主体的行動力と説明されている。子どもの時期の読書量が、その後の思考力や行動力に影響を与えるというこの結果は、子どもの頃に本を読むと、認知機能を高める、いわゆる頭が良くなるだけでなく、自己肯定感や行動力も育まれるという、良い事尽くしに感じられ「本を子どもに与えましょう」という、読書推進スローガンの根拠とも捉えられる事が予想される。

しかし注目すべきは次の調査結果である。子どもの読書量は読書活動に関する経験の内容に依ると言う。例えば「ジャンルを問わず読む」「同じ本を繰り返し読む」「絵本を読んだ」などを多く経験したことが読書量の多さと関連する一方で、「1日に読むページ数を決めて読む」「著者がどのような人か理解してから読む」「学校や市の推薦図書を選ぶ」を多く経験すると、読書量が少なくなる事が明らかとなっている。大人が本を指示的、強制的に与えると、子どもの本を読む事への興味関心が軽減する事が、この読書量に影響を与える経験内容から推察できる。

*石巻専修大学人間学部人間教育学科

読書量の多さに関する項目に「絵本を読んだこと」が含まれているが、この調査の対象となっている小学校高学年の前段階までは、絵本は恐らく大人から読み聞かせられていたものであろう。その時期に、保護者が「ジャンルを問わず」「同じ本を繰り返し」、子どものイメージや体験を広げたり、子どもの興味関心に合わせたりしながら、読み聞かせを行う事が出来れば、子どもは後に、読書を継続する可能性が高くなると思われる。

幼児期の読み聞かせの頻度や内容がその後にどのような影響を与えるかについては、ベネッセ教育総合研究所「幼児期の家庭教育調査」(2018) でも明らかにされている。[4)]

この調査では、幼児期の読み聞かせの頻度が高いほど、児童期のひとり読みの頻度が高まることが報告されている。また、幼児期の読み聞かせで、内容について親子で話す等、双方向のやり取りに時間をかけているほど、児童期にも、本について保護者と話したり、感想を述べたりする時間が長くなる事が明らかにされている。児童期の読書体験の親子での共有時間の長さは、子どもの論理性の獲得にも影響を与えている事が分かっている。

また、同調査における、読み聞かせをしている時の子どもについては、年齢が上がる毎に「繰り返し読んで欲しがる」「次のページをめくろうとする」姿は減少し、「静かに聞く」態度は増加するものの、どの年齢の子どもも6割程度が「絵を見つめたり指さしたりする」「内容について質問する」等、保護者とのやり取りを楽しむ姿が窺える。

前述した二つの調査結果から、子どもの読書活動に影響を与えるであろう絵本の読み聞かせは、結果として、児童期以降の思考力や行動力に影響を与える可能性が高い事が推察される。しかしこの事は単純に「絵本を子どもに読んで与える」大人から子どもへの一方向的なかかわりの結果ではなく、大人と子どもの双方向的なかかわりが、子どもにとって良好な影響を与えている事が明らかにされている。しかし、読み聞かせによる子どもへの良好な影響が表れているという調査結果の一部にのみ注目が集まると、読み聞かせの目的が、「子どもの論理性の獲得」のような狭義の効果を得るものとなり、保護者は子どもの能力獲得のために「読み聞かせをしなければいけない」と義務的に感じてしまう恐れもある。

また多くの子育て支援の場で行われている「親子向け絵本の読み聞かせ」の場が保護者の負担になっているという調査結果も存在する事から、次節ではその事について検証を進め、さらに保護者を支援するための「読み聞かせ講座」について考察を深める。

2.2 「読み聞かせ講座」は子育て支援になり得るか

前述したように、子育て家庭の孤立化を防ぐ等の目的で設置されている、子育て支援拠点では多くの乳幼児と一緒に保護者が参加できる様々な講座が開催されている。中でも「絵本の読み聞かせ」は、準備物や費用の少ない催し物として、定期的に行われる機会の多い活動であると考えられる。

岡村・平松（2013）は、絵本の読み聞かせ講座に参加した母親の心理的影響について調査を行った。[5)]調査の際に、講座参加者を「読み聞かせ・子有群（母親が我が子と共に集団読み聞かせに参加）」「読み聞かせ・子無群（母親のみで集団読み聞かせに参加）」「ひとり読み群（絵本を配布し母親が個人で読む）」の3つの群に分け、活動後の母親の気分や感情の変化を測定・調査したものである。その結果、どの群も、母親が読み聞かせ講座に参加したり、一人で絵本を読んだりした後は、母親自身のイメージ・気分・感情が穏やかな方向に改善されることが分かったと言う。

しかし、参加形態別の検討をすると、子を介さない「読み聞かせ・子無群」「ひとり読み群」の方がより気分の安定が認められた。その理由として、子どもと一緒に講座に参加した母親は、我が子の講座への参加態度が気になり、周囲への配慮をしていると見られ、その事が、母親自身の講座参加における「緊張・不安」につながることが予想されている。また調査時の様子として「子どもが読み聞かせに参加しないことに悩む姿や、絵本の最も近くに座った子どもが身を乗り出して、時には立ち上がって聞き始めると、他の子どもから“見えない！”という声が上がり、母親が困った様子を見せたり叱ったりしながら子どもを座らせる親子が観察された。」[6)]と記載されている。

読み聞かせ講座に参加する我が子の様子につい

ての母親の意識に関する調査としては、岡村・片山（2018）らが、2年程度、読み聞かせ講座に継続参加した母親の語りを分析している。[7]そこでは、絵本を通した親子の触れ合いに関するエピソードは語られず、「我が子が座って読み聞かせに参加できるようになった」事に意味を見出した意見が過半数だったことが報告されている。

前述した講座参加の、困りながら子どもを座らせた母親や、座って参加できた子どもの行動に意味を見出した母に共通する思いは、「子どもが周囲に迷惑をかけず、静かにそこにいられることを良しとする」事だろうか。

ここでは、子どもが絵本を見たり、絵本の世界に触れたりする事の意味について、母が考える事は難しいだろうし、ましてや、母自身が絵本を楽しむ余裕等、皆無の状況である。

そもそも、子育て家庭のつながりや癒しを目的とした集いの場で、もし保護者が緊張や不安を感じているとしたら、この「読み聞かせ」は支援にはなり得ない。では保護者にとって、どのような場で有るべきか。

砥上・菅原（2017）は、読み聞かせ講座参加の保護者にアンケート調査を実施し、支援のあり方について検討を行った。[8]ここで重要視されているのは三つの支援である。

一つは、親自身が絵本の読み聞かせが親子の交流になっている事を意識化する機会を設ける事だと言う。「読み聞かせの時間が子どもにとって心地よい時間となることで、絵本に対しての興味や関心も育まれると考える。またそのような子どもの変化から、親が持っている不安や心配が緩和され、喜びにつながる事もある。」[9]子どもが絵本を楽しめることが、保護者の不安や心配の軽減に、そして子どもの成長への喜びにもつながるという事だろう。親子で一緒に絵本を見る事については、岡村ら（2020）は、「読み聞かせの場は、共同注視による親子の情緒的なコミュニケーションが活性化し、母親の気分や感情に肯定的な変化が有る」事も示している。[10]一緒に絵本を見る事、それだけでコミュニケーションになる事を、保護者に意識してもらう働きかけが必要であると言う。

二つ目は保護者にとっては疑問に感じるであろう、絵本を見ている時の子どもの行動について、子どもの代弁者となって保護者に伝えていく事である。子どもの行動には意味が有り、読み聞かせの場面で、その絵本に集中できない、興味を示さない様にみられる子どももいるだろう。支援者は子どもの行動の要因を推察しながら、保護者への説明を行っていく事が必要である。

三つ目は、読み聞かせの方法や応答的なかかわりを、支援者が保護者にモデルとして示していく事とされている。子どもとふれあう、楽しい時間を分かち合い、子どもの心の安心や安定につながるような支援者の応答的・共感的かかわりが重視される。

ここで注目すべきは、読み聞かせ講座を主催する側の、保護者を支援する役割という視点である。先の講座参加の母達は、絵本を見る事は子どもにとって良い事だろうが、参加する我が子の態度が気になり、周囲に迷惑をかけずに参加させたい、というプレッシャーにさいなまれていた。子育て支援を目的とされている事業であるにも、かかわらずだ。

岡村ら（2020）は、子どもが読み聞かせを聞いている時に、興味を示して何らかの言動を通してサインを出したり、母親が子どもに合わせて的確に対応できていたりする事を「支援者から母親に伝えることで、一緒に読み聞かせに参加したり、親子で同じ絵本を眺めたりすることそのものが子どもの成長に役立っているという実感を得ることができ、母親の緊張、不安の軽減や心理的変容に繋がると考えられる。」[11]と述べている。

これらの事から読み聞かせが保護者にとっても、心理的に良好な改善が見られる要因になり得るものであると理解できた。また子どもにとって、心地良い読み聞かせが絵本そのものへの興味関心につながる事と同様に、保護者が心地良い読み聞かせの場を体験する事は、自身が絵本に興味を持つ等、保護者自身に変化をもたらす可能性に繋がるものと思われる。検討を進めるために、次に読み聞かせが与える影響についての文献を整理する。

2.3 「読み聞かせ」は相互的な活動

絵本の読み聞かせに関するこれまでの研究は子どもの発達や保護者の行動への影響を調査したも

のが多いが、ここでは、保護者が読み聞かせにどのような価値を見出しているかについて考察したい。

中根・中谷・小林は、読み聞かせの主体である保護者に、絵本の読み聞かせの観察・インタビューし、データ分析を行った。[12)]

ここでは以下のような考察結果が得られている。「（前略）親は読み聞かせの中で見られる子どもの反応から、『子どもの成長・発達に関する価値』『今ここの子どもに関する価値』『今ここの自分に関する価値』を見出していること、またそれは親のポジティブな感情をもたらすこと、さらに親はこれらを強化するように読み聞かせの中で子どもへの働きかけを変化させていること」[13)]が示された。そしてこの考察の中の「今ここの自分に関する価値」とは、これまでの読み聞かせ研究で扱われてきた「子どもにとっての良さ」とは異なる、保護者自身にとっての価値であると言う。そして、これまで語られてきた、読み聞かせの意義が「子どもの発達・機能向上」や「絵本を子どもが楽しむ」観点で語られてきた事と比較して、「読み聞かせにより、自分と子どもが同じ絵本という媒体に注意を向け、自分の働きかけに対して子どもが反応する事が、読み聞かせが一方的な押し付けではなく、『活動を共有している』『二人で楽しんでいる』といった感覚をもたらしており、これが親にとって大きな価値として認識されていた」[14)]事を重視した。

考察されているように、保護者は、絵本を見て聞いている子どもの姿から、子ども自身と自分自身についての変化を感じ、価値を見出し、また「（前略）自身の読み聞かせが子どもの成長に寄与しているという読みがいを感じる」[15)]事も少なくないであろう。中根らは「読み聞かせは、子どもに与えるだけの行為ではなく、親にとっても子どもとの良いコミュニケーションを実現する時間であると言える。」[16)]として、絵本以外の玩具等では実現されにくいとする、読み聞かせによる、子どもとの時間の共有や、保護者のコミュニケーション感覚の獲得を強調している。

この事から、保護者が読み聞かせについて子どもにもたらす価値を感じるに留まらず、自身にとっても価値を見出すものとして捉えている事が明らかにされた。

次に、読み聞かせを「絵本を通した大人と子どものかかわり」と捉え、親子でなく、保育園や幼稚園の保育場面において検討する。

西隆太郎は、読み聞かせについて「子どもたちと絵本を通して触れ合い、かかわる体験は、一般に『読み聞かせ』と呼ばれているが、その実際は、必ずしも保育者が文字通り『読んで聞かせる』だけの一方的なものではない。子どもたちが絵本に触発された思いを声や言葉で、体一杯に表現したり、保育者の膝のうえに子どもが座ってくつろいだり、じゃれついてくる子どもたちとのかかわりに保育者の心も動かされたりといった相互性が、読み聞かせの体験を生きたものにしている。こうした相互的なかかわりは、子どもたちと保育者との間の信頼関係によって支えらえている。」[17)]と述べている。ここでも読み聞かせは、読む側から読まれる側に対しての一方向的な働きかけによって成立するのものではなく、読む側の保育者も心が動かされるという相互性が重要視されている。また、西は、絵本の読み聞かせの先行研究に関して、知的発達についての効果が問題にされがちだと指摘しながら「絵本ばかりでなく保育全般に言えることだが、『効果』ばかりを問題にするとき、われわれは子どもを大人より低く見て、その人間的・文化的世界を軽視してしまっているのではないかと思われる。（中略）絵本は知的発達を促進するためだけに与えられるのではなく、何よりもまず、感動や意味の体験、想像の広がりを共有させてくれるものなのである。」[18)]と述べている。

西は、自身が訪れた保育園の２歳児クラスの子どもへの読み聞かせのエピソードから子どもの行動について考察している。以下要約する。

「これ読んで」と一人の子が言うと、他の子たちもやってきて、一斉に「これ読んで」と言い始め、絵本を持ち寄りながら何人かの子どもたちが集まり、絵本を読むことが続いた。その中で『おにぎり』[19)] を読んだ時、読み始めると、子どもたちの手が伸びてきて、絵の中のおにぎりに一斉にぱくつく。中には、取り合いになる子どもたちもいるが、ともかく心ゆくまで食べると、落ち着き始めるので、また次のページへ進む。時々、絵の中のおにぎりを読み手である西の口まで運ぶ子どもも

おり、「ありがとう」と言うと、今度はみんなで一斉におにぎりを食べさせる。それを繰り返しながら、一冊の本を読み終えた、というエピソードである。[20)]

2歳児は自分の持つ絵本を読んでほしくて小競り合いが始まる事も多い。この時期の自己主張は、容易に譲ることが出来ない真剣なものであると同時に、「子どもたちは何か特定の作品の内容を読んで聞かせてもらいたいという以上に、むしろ『私の本』を読んでほしい、さらに言えば『私自身』を受け止めてほしいという思いで絵本を持ってくるように感じられる。そう考えると『読み聞かせ』は、作品の内容を一方向的に伝達するのではなく、共に読むことを通して子どもの存在を受け止める、相互的なかかわりだと考えられる。」[21)]と、考察されている。

西は、他にも読み聞かせを通して、読み手（大人）と聞き手（子ども）の関わりについてのいくつかのエピソードを提示しながら、その相互作用が関係性や保育を深めていることを示している。

絵本や読み聞かせに関する活動は、ともすると、知的発達から捉えられ、絵本に描かれている内容を客観的に理解する事や、集中して最後まで聞けるかという事に関心が寄せられてしまう事が多い。また今日、書店の絵本コーナーの推薦本が、脳科学者に監修されていたり、読み聞かせを脳科学的に推奨する絵本の帯を見たりすることも増えてきた。保護者は「絵本を読むことが良い」と思ってはいるものの、しかし、それは「子どもにとって」、もっと言うと「子どもの知的発達にとって」の効果を、数多の情報の基、期待させられているように思われる。

しかし、ここまで見てきたように、読み聞かせは、保護者自身にとっても、十分価値を見出せる活動であると同時に、子どもと一緒に相互的にかかわり、子どもを受け止め、保護者も子どもに受け止められる、その関係性をも深められるものでもある。

また、読み手聞き手の関わりが相互作用であると言うならば、講座主催側の支援者という「読み手」と、「聞き手」である親子、あるいは保護者の相互作用が、その関係性を深めることが出来る活動としても、「読み聞かせ」が成立し得ると考えられる。この事は改めて、子育て支援の在り方を探求する事に繋がると思われる。

3. 絵本を用いた子育て支援活動の実践報告と考察

先行研究から、既存の子育て支援を目的とした読み聞かせ講座が、保護者の不安や重圧に気づかず、保護者を支援するものとして十分に機能していない可能性が推察された。また今般の、絵本の売り上げ数や書店での絵本紹介等を見ると、脳科学者の推薦や知的発達を促す絵本の購買誘導への操作を感じずにはおられず、子どもや保護者にとっての絵本や読み聞かせの多様な意義を保護者へ周知するに至らない現状が感じられた。

そこで、筆者は自治体やNPOと連携しながら、保護者に向けた「読み聞かせ講座」を実施した。講座において参加者の様子を観察し、講座終了後に保護者アンケート調査を行った。その後保護者のとっての絵本や読み聞かせについてのニーズや悩みを整理し、絵本を活用した望ましい子育て支援について考察を行った。

3.1　目的と方法

開催目的：子育て支援の場作りを通して、地域の親子の必要とする支援を探る
（・読み聞かせの場における保護者のニーズの把握・読み聞かせの場における保護者と子どもの実態把握・絵本を活用した子育て支援の在り方の検討）
講座内容：絵本の読み聞かせ、絵本紹介、具体的な子育ての手立てについて提案、参加者同士の交流
対象：読み聞かせの対象は主に保護者
（参加は親子でも可）
場所：A市子育て支援センター（自治体）
　　B市子育て支援拠点（NPO）
期間：令和4年6月～令和5年1月

3.2　結果

表1　講座1「大人のための絵本さろん」

開催日時	令和4年6月18日（土） 9：30～10：00
場所	A市子育て支援センター

参加人数	親子４組（母３父１）　大人のみ４名
読んだ絵本	『だるまさんが』『だめだめ、デイジー』『質問絵本』『おこりんぼママ』『あるくはやさで』
観察結果	子どもが気になり、集中できない保護者もいた。土曜開催だったため、乳幼児のいない保護者、保育士の参加有り。
参加者アンケート結果	「色々な絵本との出会いが有り楽しかった」「大人も絵本で癒されると感じた」「また参加したい、また絵本を読んでほしい」等

表２　講座２「大人のための絵本さろん」

日付	令和４年９月２日（金） 9：30～10：00
場所	A 市子育て支援センター
参加人数	母子１組（子０歳児）
読んだ絵本	『わにわにのおふろ』『きらきらぼし』『いいきもち』『あんなにあんなに』
観察結果	さろんを通して親子とかかわることで、母が普段の育児の相談をするきっかけとなった。さろんには参加せず、側にいた親子も、「読み聞かせ」を眺める姿が有り、絵本を知ってもらう機会となった可能性が高い。
参加者アンケート結果	「子どもの様子から絵本を購入したい気持ちになった」「絵本を見て普通の歌が子守歌になると知り、驚いた」等

表３　講座３「大人のための絵本さろん」

日付	令和４年10月20日（木） 10：30～11：00
場所	B 市子育て支援拠点
参加人数	母子２組（共に子０歳児）
読んだ絵本	『こんにちは！マトリョーシカ』『バスにのって』『いいきもち』『きらきらぼし』『あなたが大人になったとき』
観察結果	０歳児は側にいられるため、母は集中出来た。「大人向け絵本」という紹介で、母たちは「自分が見よう」という姿勢が強化されていた。
参加者アンケート結果	「自分に読み聞かせをしてもらい、嬉しかった」「絵本を紹介してもらい良かった」等

表４　講座４「大人のための絵本さろん」

日付	令和４年12月１日（木） 10：30～11：00
場所	A 市子育て支援センター
参加人数	母子２組（子３歳、４歳）
読んだ絵本	『もこもこもこ』『かみさまからのおくりもの』『おくりものはなんにもない』『しーっ』
観察結果	母達は、絵本や読み聞かせについての相談・質問が有り、参加した。（「絵本を見ない」「同じ本ばかり見る」「文字を全く覚えない」「毎日読めば良いが得意でない」等）相談後は、その子のペースに合わせる事が良い、と感じていた様子。
参加者アンケート結果	「話を聞きながら、自分の子育てについて考えられた」「子どものペースに合わせて焦らず読み聞かせしたい」等

表５　講座５「グループ相談・絵本を知ろう　子育てのヒント絵本」

日付	令和５年１月21日（土） 10：00～11：00
場所	B 市子育て支援拠点
参加人数	親子２組（０歳児母子、０歳児父母）
読んだ絵本	『あなたがおとなになったとき』『えほん・絵本・134 冊』（絵本の紹介本） ※ 20 冊程度の絵本を陳列し、自由に絵本をみてもらう時間を設けた。
観察結果	子どもの好きな本を、子どものために選ばなければ、と強く意識している母達の姿が見られた。父は自分の興味で絵本を選んでいる様子。
参加者アンケート結果	「どんな絵本がよいか、どんな読み方が良いかヒントになった」「たくさん絵本が有り、秘密の図書館に来たようでワクワクした」等

3.3　考察

まず、アンケートの結果として、多くの参加者から、自分のために読んでもらい「嬉しかった」「癒された」「また読んでほしい」という声が多く聞かれた。保護者は「読み聞かせ」を子どものためではなく、自分のために読んでもらえたと実感し､心地良さを体験した感想を持ったと思われる。

子育て支援は、保護者支援であるが、子育て支援の場での「親子読み聞かせ講座」の多くは、子ども対象の絵本についての「読み聞かせ」､或いは子どもにとって良い絵本に関する情報提供が一般的である。そのため、親子で絵本を読む、選ぶ場合に、子どもの情緒的・知的発達の促進につながる情報を求める保護者も少なくない。しかし、読み聞かせが保護者にとっても、安心や癒しを感じる心地良い感情を体感する場となれば､「子どもに絵本を与えなければならない」義務感ではなく、保護者自ら絵本と関わりたい、子どもに絵本と関わってほしいという、主体的で意欲的な行動につながる可能性も高まるのでないかと思われる。

他に「絵本との出会いが楽しかった」「絵本を見て（中略）驚いた」「たくさん絵本が有り（中略）

ワクワクした」等の声が有り、保護者自身が自分の興味や関心に基づいて、子ども中心でなく、自分事として絵本と関りを持った事が理解できた。前述のアンケートの声と併せると、保護者に向けての読み聞かせは、「子どもの為」から距離を置き、保護者自身が、絵本を楽しんだり、興味や関心を広げたりする姿に繋がり、保護者支援として成果を上げている事を示唆している。

しかし、観察結果から、アンケートの回答のみでは把握しきれない保護者の実態やニーズ等も考察された。以下に示す。

講座２において、参加せずに側にいた親子の様子や意識について講座終了後にスタッフらと話し合った。保護者には、絵本の読み聞かせは、子どもが見るもの、子どもに向けられているものという認識が強く、子どもが集中して聞けないと思えば（子どもの年齢は１歳で終始動き回っていた）、参加しようと思わないのではないか。また、主催者としては、少しでも絵本に関心を持つ親子が増えると良い、という願いがあるが、保護者が絵本に興味を示さなければ、その場に参加することが難しいという現実も有る。であるならば、その場に集中して参加しなくても、絵本が見える、読んでいる声が聞こえるという場は、保護者にとっては緩やかに参加しやすい場にもなり得ることから、今回の場の設定は子育て支援の場になり得たのではないか。

また講座５では、保護者に自由に絵本を手に取って見て貰う場を設定した。出来るだけ、多くの本を保護者自身のペースで読んでもらい、そこから参加者同士や主催スタッフとの会話に繋がる事も期待しての企画だった。しかし、予想に反して、母達は絵本を選ぶと、各自が自分の子どもに読み聞かせを始めた。やはり、母達にとっては「絵本は子どもに読んであげるもの」という意識の表れかとも思われた。父は自分の興味の有る絵本を次々と手にとっては感想を呟いていた事から、母と父の性差によっても、行動や認識の違いの有る可能性も推察された観察結果であった。そして保護者自身に、絵本との関りを十分に楽しんでもらうためには、更なる工夫が必要であることも理解できた。

また表４で示したように、講座の前後に保護者から絵本や読み聞かせについての質問や相談が寄せられた場面も有った。子どもや保護者の普段の様子も聞きながら、個々の親子に対応したが、保護者は最終的に、現在の子どもの様子を肯定し、子どものペースに合わせて絵本と関わりたいという結論に至った。

これらのことから、保護者向けの読み聞かせ講座は、親子向け読み聞かせや家庭における親子での読み聞かせ場面では味わえない、保護者は、自分に読んでもらえる楽しさや癒しを感じられる場であり、子どもを介さなくても自身が直接絵本と関る体験が出来る場となった。また、親子が読み聞かせの場に直接参加していないとしても、近くでその様子を感じるだけでも、絵本と出会う可能性が生まれる場所にもなる。また「読み聞かせ」の前後にも、主催者、参加者同士が交流する事を意識的に取り入れれば、その場だけの子育て支援として完結するものでなく、保護者や親子のつながりを広げる場としても機能出来ることが予想された。

4. まとめと今後の課題

本稿では、まず絵本の読み聞かせが子どもや保護者に与える影響についての研究を整理した。

先行研究から、読み聞かせは、子どもにとっての行動力や思考力の発達に良い影響を与えているのと同様に、保護者にとっても、気分や感情が穏やかになったり、子どもの成長を感じたり出来るポジティブな感情をもたらすものである事が認められた。また読み聞かせは大人から子どもへの一方向的な活動でなく、楽しさの共有やコミュニケーション実現の時間ともなっている事も理解できた。

しかし一方で、子育て支援とされる親子向けの読み聞かせ講座において、保護者は参加する我が子の態度が気になり、不安やプレッシャーを感じているという現実も明らかにされた。読み聞かせが、読み手である支援者から聞き手である親子に対して、「子ども向けの絵本を読む、見せる」という行為にのみ終始すれば、当然、保護者はそこで「子どもに絵本を見せなければ」という義務感に駆られるだろう。この場で絵本の良さや読み聞かせで得られるだろう様々な体験の可能性を保護者

に伝える事は出来るだろうか。この活動は、どの部分が子育てを支援することになるのか、どのように関わる事が保護者支援になるのか、改めて支援する側は問いを立てなければならない。

そこで筆者は子育て支援における有効な絵本活用について探るために、保護者向け読み聞かせ講座を実施し、参加者の観察とアンケート調査を基に考察を行った。

その結果、絵本の読み聞かせや紹介を通して、保護者は安心や癒しを感じたり、子どものためだけではなく、自分自身のために絵本に興味関心を持ったり、自身の子育てについて考えるきっかけを得たりしていた。この事は、新たな子育ての楽しさを見出すことや子育ての負担軽減に繋がると思われる。

絵本の機能について、宮下は「(前略) 大人ないし文字の読める年長の子どもによって読み聞かせられて初めて成り立つものです。絵本のおもしろさは、親子におけるように読み手と聞き手のやりとりのなかに存在するのだとすれば、やりとりの相手として読み手の人間がそこにいることが、絵本の機能を成り立たせるための最も重要な要素である（後略」[22] と説明し、聞き手が一方的に聞かされているわけでなく、「問いかけ、確認し、寄り道をし、発展させながら、絵本の世界に浸っていく事が出来る」[22] としている。

つまり、保護者向け読み聞かせ講座において、聞き手である保護者は、聞かされている存在としてでなく、絵本の世界に浸りながら様々な経験をして、子どもに対して読み手となる自分へと繋がっている存在にもなる。つまり、保護者は支援者と繋がり、子どもとつながり、違う立場の自身ともつながるという相互的な作用が、この読み聞かせの場を通して、生まれる可能性が有る。

近年、絵本を介した子育て支援のプログラムが検討され始めている。本稿では、それに触れるには至らなかったが、今後さらに、子育て支援の場における、保護者にとっての絵本や読み聞かせの意義を明らかにするために、プログラム開発やその追跡調査等も整理し、自ら講座実践を重ね、その評価を実施していく事とする。

参考・引用文献

1) 厚生労働省 HP 子ども・子育て支援 ｜厚生労働省（mhlw.go.jp）

2) 厚生労働省 HP 地域子育て支援拠点事業（mhlw.go.jp）

3) 国立青少年教育振興機構は「子どもの頃の読書活動の効果に関する調査研究」の報告書を、国際子ども図書館 HP において 2021 年 8 月に公開している。

4) 荒巻美佐子（2019）「データから見る幼児教育 読み聞かせの実態と言葉の発達：幼児期から小学生の家庭教育調査 親子間での読書体験の共有が将来につながる言葉の力を育む」『これからの幼児教育』ベネッセコーポレーション 18 － 21

5) 岡村幸代・平松清志（2013）「子育て支援における絵本の読み聞かせが参加者としての母親に与える心理的影響」『読書科学 55』1 － 12

6) 同上、8

7) 岡村幸代・片山美香（2018）「公民館における子育て支援講座に参加した母親の心理的変容に関わる語りの特徴」『家庭教育研究 23』25 － 37

8) 砥上あゆみ・菅原亜紀（2017）「言語表現の基礎を培う 0 － 2 歳児の絵本の読み聞かせ―講座における親子への支援をとおして」
『純真紀要 57』77 － 88

9) 同上、85

10) 岡村幸代・大森弘子・西山修（2020）
「地域子育て支援における母親支援を志向した絵本の読み聞かせの可能性と課題」『読書科学 62』12 － 24

11) 同上、14

12) 中根愛・中谷桃子・小林哲生（2020）「子どもに対する絵本読み聞かせから親は何を得るのか」『認知科学 27 － 2』138 － 149

13) 同上、145

14) 同上、145

15) 同上、147

16) 同上、147

17) 西隆太朗（2018）『子どもと出会う保育学』ミネルヴァ書房　177

18) 同上、179

19) 平山和子（絵）平山英三（文）『おにぎり』福音館書店

20) 前掲書 17）182

21) 前掲書 17）183

22) 田島信元・佐々木丈夫・宮下孝広・秋田喜代美（2018）

『歌と絵本が育む子どもの豊かな心』ミネルヴァ書房
宮下孝広「絵本は大人と子どもの交流の場」264

講座で使用した絵本

講座 1

『だるまさんが』かがくいひろし作、ブロンズ新社、2008
『だめだめ、ディジー』ケス・グレイ文、ニック・シャラット絵、よしがみきょうた訳、小峰書店、2004
『質問絵本』五味太郎作、ブロンズ新社、2010
『おこりんぼママ』ユッタ・バウアー作、小森香折、小学館、2000
『歩くはやさで』松本巌文、堺直子絵、小さい書房、2015（大人向け絵本）

講座 2

『わにわにのおふろ』小風さち文、山口マオ絵、福音館書店、2000
『きらきらぼし』武鹿悦子訳詞、ようふゆか絵、ひさかたチャイルド、2021
『いいきもち』ひぐちみちこ作、こぐま社、2004
『あんなにあんなに』ヨシタケシンスケ作、ポプラ社、2021（大人向け絵本）

講座 3

『こんにちは！マトリョーシカ』いわしみずさやか作、偕成社、2019
『バスにのって』荒井良二作、偕成社、1992
『いいきもち』講座 2 で使用
『きらきらぼし』講座 2 で使用
『あなたがおとなになったとき』湯本香樹実文、はたこうしろう絵、講談社、2019（大人向け絵本）

講座 4

『もこ　もこもこ』谷川俊太郎作、元永定正絵、文研出版、1977
『かみさまからのおくりもの』ひぐちみちこ作、こぐま社、1984
『おくりものはナンニモナイ』パトリックマクドネル作、谷川俊太郎訳、あすなろ書房、2005
『しーっ』たしろちさと作、フレーベル館、2012

講座 5

『あなたがおとなになったとき』講座 3 で使用
『こどもと大人をつなぐ。えほん・絵本・134 冊』増田喜昭、学研、2020　（大人向け絵本の紹介本から抜粋）